

話す力を高める授業作りをめざして

～話すことの意欲を高めるために～

鳥屋尾 慎 人

はじめに

平成25年度から本校に赴任し、所属学年の国語科を2年間担当してきた。学習に意欲的に取り組む生徒が多く、読解力、語彙力、文章力ともに高い力をもつ生徒がいる。今までの学習の積み重ねと読書量が多いことが力を育んできたのだと言えよう。しかし、そのような高い国語力をもつ生徒が多い中、「話す活動」になると、自信がなく小さい声で聴き手を見ることもなく自分のペースで終始話してしまう傾向が見られた。単元の始まりに、発表活動をすると告げると、否定的なつぶやきがあったり、発表場面を想定してより安易にできる方法を提案したり、活動そのものに対する意欲がもてない様子があった。

高い国語力をもつ生徒達の話す力を高めるためにどうしたらよいのだろうか。また、活動に意欲をもたせるためにはどうしたらよいのだろうか。という問いから

- (1) 活動へ意欲的に取り組むことができるようにICTを活用した授業を構想すること。
- (2) 本校国語科の教科構想を踏まえた授業を構想すること。

の2つを意識しながら授業に取り組んだ。

1 本学校園の国語科の教科構想について

本学校園国語科では、研究主題「学び続ける子どもの育成」を受け、一人一人が主体的に問いをもつことが大切だと考えた。そのために、だれに伝えるのかという「相手意識」や何を伝えるのかという「目的意識」がより深い問いを生み、子どもたちの言葉の力が高まっていくと考えている。

また、子どもたちが新鮮な気持ちで取り組むことができる工夫として、「より効果的な学び合いをつくる学習活動、学習形態」を考えている。以下の4つである。

- (1) リアリティのある場の設定
- (2) 様々な学習形態(ペア、トリオ、グループ等)
- (3) より良く話すための工夫の言語化
- (4) モニタリング(セルフ・友達)

これらのことをふまえ授業を構想した。

2 授業の実際

(単元1) お気に入りの本を紹介しよう

① 授業の構想

生徒との出会いの1学期。生徒の実態を把握するため、話すことへの抵抗感をどれくらいもっているかを探るためにこの単元を設定した。目的意識は、自分が好きな本を紹介し、相手に読んでもらいたいと思わせることができるかどうかとし、相手意識は、クラスの友達とした。題材については、毎日の朝読書や休み時間の様子を見ると、本を読むことが好きな生徒が多く話題には苦労しないと考えた。スピーチの形式で持ち時間は1分30秒で行った。このスピーチに向けて、5月に教育実習生が実習に来る時に1時間の授業を担当するが、そこで生徒の模範となるようなスピーチをしてモデルとなる発表を依頼した。実習生のスピーチを見ながら、聴き手を引きつけるための工夫や見通しをもてるようにした。また、単元の最後にはふりかえりの時間を設定した。自らの発表を自分で見て、反省点を探したり良かった点を探したりした。そのために、ビデオで撮影した。(セルフモニタリング)また、友達の発表を見ることで自らの発表に活かせるようにワークシートに評価をさせた。

② 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	教育実習生のスピーチを見て評価する。	1	・ピブリオバトルを行い、順番にスピーチをして最後に一番読みたくなった本を決める。
2	本単元のねらい、活動を知る。今までの話す活動を振り返り、スピーチをする上で大切なポイントを考える。	2	・小学校からの学習を思い出し、スピーチをする上で何が大切なのかを発表する。 ・本単元の活動やねらいを知る。
3	発表内容を考える。	3	・スピーチ原稿を作成し、付せんを使いスピーチメモを作る。 ・発表の練習をする。
4	発表を行う。 友達の発表を評価する。	4 5	・順番に前に出て、発表をする。 ・友達の発表を評価する。
5	撮影した発表を見る。	6	・PC室のパソコンにデータを保存し、自らの発表を見る。 ・友達の発表も見て、比較して次の発表活動に向けての課題を確認する。

③ 成果と課題

今回、話すことへの抵抗感をどれくらいもっているのか。また、話すことの力がどれくらいあるのかを確認するために本単元を設定した。聞き手を引きつけるために、「構成を工夫することをねらい」の一つとして「導入部分を工夫すること」を生徒に示した。生徒の発表は、そのねらいを達成するように発表ができていた。成果としては、ねらいを具体的にはっきり示すことで生徒の話し方が変化し、工夫をしようとする姿勢が見られたということである。また、題材については読書が好きな生徒が多いという実態から設定したので意欲的に取り組むことができた。単元の最後に、自らの発表を見せることで、どのような態度で発表をしているのかを確認させることができた。友達と比較して、自らの発表には何が足りないのか、どういうことを取り入れ、工夫すると良いのかを考えることができ、次の話す活動へと意識をつなげることができた。

また、生徒の話す力の中で、「声」「視線」「速さ」等の基礎的な部分に課題が見られた。特に、「視線」は本で隠して紹介する生徒や、うつむきながら発表する生徒もおり、大きな課題として残った。話す相手がクラスの友達ということもあり恥ずかしさや照れ隠しでそのような姿が見られたのだと考えている。ある程度の緊張感や、単元に必要感を持たせるためにもリアリティのある場の設定をどう作るかが今後の課題となった。また、モデルとして示した教育実習生の導入の工夫をそのまま取り入れている生徒が多くいた。自らの発表に合うように考え工夫することで、オリジナリティが生まれ、聞き手を引きつけていくことができると思う。発表の構想の場面で、友達にアドバイスをもらい構想を直したり練ることにより、聞き手にとって新鮮味のある発表になると思う。ペアやグループでの構想を練る時間がなかったことで導入の工夫が単調になってしまったのだと考えた。

(単元2) 生徒会入会式で新入生に沖縄の修学旅行の魅力を伝えよう。

① 授業の構想

単元1の課題から、生徒の意欲を高めるために以下の三つのことを意識して単元を設定した。

- 1, リアリティのある場の設定
- 2, ICT機器を取り入れたセルフモニタリング
- 3, ペアでの学び合い

1では、相手意識・目的意識を具体的にもたせるために、毎年4月に行われている「生徒会入会式で新入生に対してプレゼンテーションをする」という場面設定にした。また、テーマは、附属中学校の特色のある行事である「沖縄の修学旅行」とした。3年生の4月の第2週目には沖縄の修学旅行に出発する生徒達にとって、詳しく調べたり、行程を考えたりしていることは伝えやすいテーマとなると考えた。前回の発表活動では、聞き手となる同級生を前にして、照れてしまい発表に集中できない姿が見られた。そこで、本単元では、新入生という仮想の聞き手を想定して、発表をビデオで撮影するようにした。

2では、ペアで発表の構想をするときに、タブレット端末を使用し、自らの発表を確認する(セルフモニタリング)を行った。ペアで一台を用意し、お互いに撮影をしてそれを見合って「どうすれば、もっと分かりやすい発表になるか」「どうすれば、もっと良い発表になるのか」という問いをもち、新たな視点から考えられるように発表を自己評価・他者評価するという時間を設定した。

3では、発表形式として個人での発表でなく、ペアでの発表とした。発表の構想から検討、推敲、吟味の各段階で意見を出し合う時間を設定した。

また、中学校内の授業研修会として授業を公開したので、以下に公開した本時の指導案を載せる。

② 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	<ul style="list-style-type: none"> スピーチ学習を振り返り、自らの課題を再確認する。 既習事項などから「話す」時に、大切なポイントを発表する。大きな枠組みとして〈表現〉〈構想〉というくくりを作り、出てきた意見を整理する。 本単元の内容を知り、学習の見通しを持つ。 	1	<ul style="list-style-type: none"> 前回の学習の振り返りシートを見返し、話すことにおける自分の課題を確認する。 今までの「話す」ことの学習を振り返り、何が大切なのかを考え、発表し、「構想」で大切な観点、「表現」で大切な観点を整理する。
2	<ul style="list-style-type: none"> ペアでプレゼンテーションを構想する。 iPadを利用し、構想したプレゼンテーションを繰り返し撮影し、見直し、再構想する。 	2 3	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手を意識し、興味を持ってもらえるように、魅力的な内容を考え、プレゼンテーションの構想を考えていく。 内容については、「総合的な学習の時間」で利用する資料を活用して適宜調べる。
3	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションの準備、撮影をする。 	4 5	<ul style="list-style-type: none"> 2F生徒プラザで順番に撮影をする。
4	<ul style="list-style-type: none"> 撮影したプレゼンテーションを視聴し、評価をする。 本単元の振り返りを書き、次の「話す」活動に向けて自分の課題を設定する。 	6	<ul style="list-style-type: none"> 発表をしたペアは、〈構想〉〈表現〉の観点から、何を工夫したのかを発表する。 話し手は、聞き手の反応や、自らの姿を見て、自己評価をする。 聞き手は、「新入生」としてプレゼンテーションを聞き、評価する。

③ 研修会における本時の指導案（第2次）

学習場面と子どもの取り組み (◎学び続ける子どもに関連する学習内容)	教師の支援と願い・評価
<p>1. 前時の学習を振り返り、本時の学習課題を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>新入生に向けて、沖縄の修学旅行の魅力を伝えるプレゼンテーションを構想しよう！</p> </div> <p>2. イメージマップを用いて、聞き手が興味・関心を持ちそうなプレゼンテーションの内容・工夫について考え、ワークシートに書く。</p> <p>3. プレゼンテーションの内容・工夫について、ワークシートをもとにペアで話し合い構想する。</p> <p>◎4. タブレット端末を用いて、構想したプレゼンテーションを撮影し、ペアで確認し、よりよいプレゼンテーションになるように吟味する。</p> <p>5. 本時の学習で、聞き手を意識して構想したことを全体に向けて発表する。</p>	<p>・自らも新入生入会式に参加しているので、その時の心情を思い出させるための声かけや支援をして、聞き手となる新入生の心情を考えさせる。</p> <p>・総合の時間に使っている資料を置き、調べられるようにしておく。</p> <p>・生徒が撮影したものを、一緒に見て、生徒のねらいを把握し、よりよいプレゼンテーションを構想できるように声かけをして考えさせたい。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">評価の観点(話すこと)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞き手に興味・関心を持ってもらえるように、内容を考えている。 ・相手が誰であるかを根拠として、言葉の選定、話し方、など工夫を考えている。 <p style="text-align: center;">【評価方法 ワークシート・話し合い】</p> <p>支援</p> <p>聞き手が、興味のある話題を見つけられるように助言する。</p> </div> <p>・聞き手の心情や聞き手が何に興味・関心を持つかを考えて構想している姿やワークシートを紹介する。次時に向けて、視点となるものを紹介したい。</p>

○関心・意欲・態度の評価

評価基準	A	B	C
	聞き手にとって魅力あるプレゼンテーションを構想するために、意欲的に取り組んでいる。	プレゼンテーションを構想するために、取り組んでいる。	プレゼンテーションを構想しようとしていない。

○思考力・判断力・表現力の評価

評価基準	A	B	C
	聞き手に興味・関心を持ってもらえるような適切な内容や魅力ある話し方を選び、伝わりやすくなるような工夫を考えてプレゼンテーションを構想している。	聞き手を意識し、話題や話し方を選び、プレゼンテーションを構想している。	聞き手を意識せず、プレゼンテーションを構想している。

④ 成果と課題

成果としては、ICTを使用することで、活動に対する生徒の関心・意欲を高めることができた。修学旅行という生徒が楽しみにしている行事を題材としていること、時期にぴったり合うといったこと、発表する相手が新入生を想定していることが生徒の意欲を高める要因となった。また、ICTを利用することには、繰り返し見ることができるという利点があり、失敗した箇所や実際に見て思ったこととは違う箇所を見つけ、修正することができた。そして、前回の発表活動のふりかえりをもう一度確認させたことで、発表に向けて課題をもって取り組むきっかけとなった。最終的には、それぞれのペアの発表を全員で鑑賞し、聞き手として見た場合の自らの発表や、友達との比較をして出てきた課題について次回の発表活動に活かす単元となった。

課題として、ICT（タブレット端末）の使用法を生徒に定着させる必要がある。今回、初めて生徒にタブレット端末を使用させた。機器そのものへの興味が大きく、画面の設定を変えたり、映像が撮れることを楽しんだりする姿が見られた。タブレット端末の使用の仕方について繰り返し指導をする必要性があった。また、タブレット端末を使用する場を発表の考察段階で使用した。生徒の反応として必要感をもっておらず、タブレット端末を使用する目的がはっきりしていなかった。より細かい使用場面の設定が必要になってくると感じた。



図1：2人で1台のタブレット端末を使用した

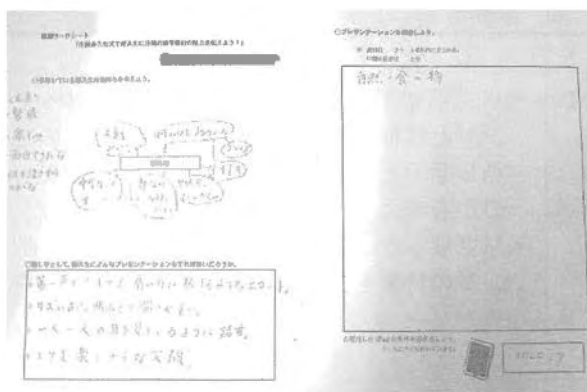


図2：授業で使ったワークシート

(単元3) パブリック・スピーキングをしよう。

① 授業の構想

単元1、2の課題から生徒がさらに意欲を高め活動に取り組み、話す力を高めるために以下の2つのことを意識して単元を組み立てた。

- 1, 題材や相手意識、目的意識を生徒の実態に即して設定する。
- 2, ICT機器の効果的な活用。

1, については単元1、2で取り組んだことを引き継ぎ、さらに生徒が喜んで活動するために何が良いかを考えた。単元2を踏まえ、題材への興味ではなく話すことそのもので生徒の意欲が高まるものはないかと考えた。そこで、生徒の実態を中心に単元を設定しようと考えた。本学年の生徒は、各教科で自らの意見を発表することを好む傾向があった。各教科では、資料や実験など根拠をもとに自らの論理を組み立て、発表し相手の意見との共通点や相違点を探し、考えを深める授業に取り組んでいた。ここから、情報を伝えることよりも、情報から自分の考えを発表することに慣れていて、楽しめると考えた。そこで、パブリック・スピーキングという生徒が聞き慣れない発表形式を提示し、「相手の心情を揺さぶり、相手の価値観を変える」という目的意識をもたせた。

2, については、単元2を踏まえICTの利用によって、興味や意欲を高めるだけでなく、学習内容を深めるものでないと意味がないと考え、意欲を高めるためにそして、さらに生徒の話す力を伸ばせるように使用場面と、使用機器を考えた。本単元は、学校園の授業研究会にて授業を

公開したので、単元計画、公開した本時の指導案を以下に載せている。

また、リアリティのある場の設定として今回は伝える相手がクラスの友達ということもあり、単元1のように照れくさかったり、恥ずかしかったりして意欲的に発表ができない生徒がいると考えられた。そこで、ICT機器として「クリッカー」を利用した。クリッカーは、複数の選択肢からボタンを押してどれかを選ぶというICT機器である。即時に聞き手の反応を知ることができるので、発表の評価を知ることになる。発表する相手はクラスの友達であるが、緊張感が生まれ、リアリティのある場となると考えた。

ペア・グループでの活動も適宜取り入れた。「よりよく話すための工夫の言語化」を意識し、付せんを用いてお互いの発表がさらに良くなるように意見交流をした。



図3：クリッカーのリモコン



図4：授業の様子

② 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	<ul style="list-style-type: none"> パブリック・スピーキングとは何だろう？ 話し手のどこがすごいのかを考えよう。 パブリック・スピーキングの特徴を整理しよう。 	1 2	<ul style="list-style-type: none"> パブリック・スピーキングの具体的な例を見る。 話し手の工夫や話し手のよいところを考え、目指す話し手のイメージをふくらませる。 パブリック・スピーキングと既習の発表活動との違いを整理し、将来的にどの場面で用いるかを考え、学ぶ意義をもつ。また、発表で意識することを班で意見交流し焦点化する。 パブリック・スピーキングは聞き手の価値観や考えを揺さぶる言語活動であることを知る。
2	<ul style="list-style-type: none"> 発表のテーマを決めよう。 同級生の価値観や考え方を知ろう。 	3	<ul style="list-style-type: none"> 社会生活の中から題材を集め、「〇〇のよさ」という観点から話したいテーマを決める。 聞き手の実態をつかむアンケートを考え、アンケートを行う。
3	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手の実態に合わせた発表を考えよう。 意見交流をし、発表をよりよいものにしよう。 	4 5 6	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手の実態を知り、発表内容や表現の仕方を考える。 発表内容を原稿に書き、1次で学習した聞き手の価値観や考え方を変える工夫を取り入れる。 構想した原稿を生活班で読み、付せんにアドバイスをもらう。
4	<ul style="list-style-type: none"> パブリック・スピーキングをしよう。 友だちの発表を聞き、クリッカーを用いて自らの立場を表明する。 	7 8 9 10	<ul style="list-style-type: none"> 話し手としてパブリック・スピーキングを行う。 聞き手として、他者の発表を聞き、クリッカーで発表を聞いた意見を投票する。よかったことをまとめ、自らの発表に利用できることを見つける。 話し手の発表によってなぜ聞き手の考えが変わったのか。変わってないのかを考え、自らの発表に生かせるようにする。

③ 研究会による本時の指導案（第4次）

○ ねらい

友達の発表を聞き、見つけた良さや工夫を自らの発表に生かし、語句や文を効果的に使い、説得力のある発表ができる。

学習場面と子どもの取り組み	教師の支援と願い・評価
<p>1. 本時の発表者が、グループの友達に向かって発表練習をする。聞き手は、アドバイスを付せんに書き発表者に渡す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・間をもっととる方が良いと思うよ。 ・図の出すタイミングは早い方が良いよ。 ・目線をあげて、聞き手を見ながら話した方が良いよ。 ・少し早いと思うから、ゆっくりと話す方が良いと思うよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の発表者の工夫や良い点を参考にするよう伝える。 ・各グループで意見を出したパブリック・スピーキングにおけるポイントを紹介し、想起させる。 ・付せんに文で書くように指示を出し生徒がアドバイスをしやすいようにする。 ・手順を説明し、時間を区切り活動できるようにする。
<p>聞き手の考えや気持ちを揺さぶり、説得力のある発表をしよう。</p>	
<p>2. 発表をする。 (話し手)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞き手の価値観や心情を揺さぶる発表を目指し発表する。 <p>(聞き手)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者の良いところ、工夫、すごいところを書き、自らの発表にとりいれるところがないかを考える。聞き手の考えや心情が大きく変わったものに印をつける。 <p>3. アンケートに答える。</p> <p>4. 本時の話し手の発表について生活班で振り返る。 (考える視点)</p> <p>①〇〇の発表で数字が大きく変化したのはなぜか。 ②〇〇の発表で数字が大きく変わらなかったのはなぜか。 ③生徒と参加者の数字の変化が大きく違うのはなぜか。 (※発表の結果を見て取り上げる)</p> <p>5. 本時の学習の振り返りを書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手が発表者のすごい点、工夫点、良さをワークシートにメモできるようにする。大きく価値観が変わった発表や変わらなかったものについては、印を付けさせる。 ・ICT機器を用意し、発表前後の聞き手の変化を話し手が分かるようにする。 ・参観者にもアンケートを採り学習に活かせるようにする。 <p>・板書を見てどれだけの変化があったのかを見て分かるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">— 評価の観点(話すこと) —</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちの発表のよいところ・工夫を取り入れて自らの発表に活かし説得力のある発表をしている。 <p style="text-align: center;">【評価方法 発表・観察・ワークシート】</p> </div> <p>支援 説得力のある発表をするために、表現方法や語句や文の使い方での工夫ができるかを考えられるように声かけをする。</p> <p>(アンケートの集計結果によりふり返りを変える)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きく数字が変化している箇所について考えたことを自らの発表に活かせるように振り返りをする。 ・生徒の評価と参観者の評価を比べてふり返りをする。

④ 成果と課題

本単元で、生徒の実態から活動や目的を設定したのは生徒の活動への積極的な姿から考えて成功だったと考えている。生徒のふりかえりには以下のようなものがあった。

○全員の発表を聞き手として聞いて、自分の発表に足りなかったのはコミュニケーションを取る

ための工夫かなと感じていました。読み手とコミュニケーションを取ったり、資料を使ったりすると聞いていて興味をひかれたり、考え方が伝わってきたのでこれらの方法を今後取り入れていきたいです。(生徒A)

- この単元を振り返って、クラスの人達は様々な方法を使って、注目を集めようとしていてすごいと感じました。僕は、まだまだ注目させる工夫をする必要があるなとひしひしと感じました。ぜひ、この単元で学んだことをいかしてスピーチをできたらと思います。(生徒B)

生徒A、Bともに友達の発表を見て、よいところや自らの発表には足りなかったところを振り返っている。友達の発表が良いものでなければ、このように聞き手として友達の発表に注目して自らの発表を振り返ることはなかっただろうと思う。生徒の実態と目的意識をはっきりとさせたことが、意欲的な発表につながったのだろうと思う。また、このようなふりかえりもあった。

- 工夫点(みんなをひきつける)がみんなバラバラで内容もみんなの気をひくもので、(誰もあまり気づかないところ)すごくいいパブリックスピーキングだったなと思います。聞き手の人も話し手の人が笑わそうとしている時にちゃんと笑っていてすごいなと思いました。(生徒C)

聞き手をクラスの友達と設定したことで、人とは違う内容や工夫をしようとしたり、ユーモアのあるスピーチを考えたりする生徒がいた。今まで確認してきた聞き手意識、場の意識が生きたのだと考えている。

課題は、本単元のねらいとして考えていた「語句や文を効果的に使う」ことは、ほとんどの生徒の発表の中で、工夫され発表に現れていたが、生徒はそのことを十分に実感としてもっていないということである。本単元で、何の力がついたのかを意識できず、反省点のみに注目し、一部の生徒は「話す速さ」や「声の大きさ」「態度」だけに意識を向けてしまっていて、新しい学習内容まで意識を向けることができていることが分かった。そこで、話す学習の中で、単元を終えた時に、生徒が新しいこととして何か学んだと実感できるような工夫が必要だと感じた。

おわりに

それぞれの単元ごとの成果や課題について今まで述べてきた。各単元の取組を通して、出会ったときの生徒と比較すると話す活動に意欲的に取り組むことが多くなったと感じている。しかし、意欲を高めながら、表現力の要素である話すことの基礎的な部分の力をいかに付けていくのかが今後の課題である。そこで、来年度から今までの取組に付け加えて以下に示すことを授業で取り組み研究していきたいと考えている。

- 話すことの基礎的な力は、時間をかけて継続的に取り組むことが必要であると感じた。そこで、日常的な指導として取り入れていく。(毎時間5分間等)具体的には、詩、古文、絵本の一節などを声に出して読むことにより、声を作る、話す速さ等を意識づける。

- 話すことの学習では、指導と評価を明確にする。そして、評価が到達目標として生徒に分かりやすいものであるように心がける。

(今回は、新たに○○を学んだとはっきり生徒が意識できる目標)

- 生徒の必要感を高めるために、学校行事、総合的な学習の時期をとらえて特設の時間を設定する。

(とやお まさと 国語科 masatoyao@edu.shimane-u.ac.jp)